[原 著]

多数者意見変動状況において意見の Reality が 同 調 に 及 ぼ す 効 果¹⁾

九 州 大 学
吉 武 久 美 子

問 題

本研究は、多数者行動変動の過程として形成期、一致期、崩壊期の3期を設定し、多数者意見の Reality の高低が各期における同調に及ぼす効果を検討しようとするものである。

同調実験の課題としては、これまで線分の長さやクリック音、点の数といった知覚刺激が多く用いられてきた(Asch, 1956; Olmstead & Blake, 1955)。そして知覚刺激に対する多数者の誤った知覚判断が、“多数者からの圧力”となり、被験者の判断に影響を与えたと考えられてきた。

このように、実験状況が正確な知覚判断を求めるものである場合、多数者の判断として被験者に呈示される判断がどの程度事実から隔ったものであるかという点は、同調の重要な規定因の1つと考えられる。これまで、この多数者意見の隔りや誤りの程度と同調との関係については、意見課題、情報課題、視覚課題等一括して、“自己意見と他者意見のズレと同調”として研究されてきた(Olmstead & Blake, 1955; Schroder & Hunt, 1958; Nemeth & Markowski, 1972)。しかし、ズレの程度と同調の間は一貫した関係が見出されていない。また課題の種類によっても必ずしも結果が一貫していない。そこで、意見のような主観的要素の強い課題と、客観的な正解が存在する知覚判断のような課題とでは、自己と他者の判断の間のズレの持つ意味が異なるのではないかと考えられる。従って、他のさまざまな要因に影響されやすい意見課題よりも、より心理的に純粋な知覚判断課題を本実験では取り上げる事にする。

さて、正解を持つ知覚判断課題においては、被験者(以下、Ss と略す)にとって他者の主張する意見が非常に誤

っていると受けとられる場合と、正解かもしれないという場合とでは、Ss に与える意味が異なると考えられる。すなわち、Ss ははもとと知覚判断を集団の中で行なう時には、(A)正しい解答をしたいという動機、と(B)皆とちがう解答をしたくないという動機とを持つと思われる。従って、非常に誤っているときの他者意見に同調する時の“同調”は(B)の動機のみしか満足させない。一方、正解に近い他者意見に同調する時の“同調”は(A)も(B)もほぼ満足させるであろう。すなわち、非常に誤った意見への同調と、正解に近い意見への同調は異なる側面を持つと推察される。そこで、知覚課題のような正解が存在する課題においては、他者意見が正解からどの程度ずれているか、すなわち他者意見のもつ Reality の高さが重要な要因と考えられる。正解に近く、より正しいものを Reality 高とし、正解から非常に隔り誤ったものを Reality 低とする。本実験では、多数者意見が Reality 高の場合と Reality 低の場合の、同調行動のちがいを検討する事が第1の目的である。

ところで、これまでの同調実験では、集団内の意見の一致が既に形成されている中での同調行動が検討されてきた。すなわち、Ss が答える直前に Ss に呈示される他者意見(さくら)の意見は常にある誤った意見に一致した状態である。しかし、現実の社会状況を考えると、集団の意見がはじめて既に形成されているというよりも、各成員がばらばらの意見を有している状態から徐々に集団意見が形成されて1つにまとまっていくという経過をたどる事の方が多いと思われる。つまり、これまでの同調実験は、集団の意見が既に一致し安定している状態という一側面だけを取り扱ってきたのであり、その前の形成の段階や、あるいは集団意見が再び分かれていく崩壊の段階についての研究が欠けていたと思われる。

1) 本論文の作成にあたりまして御指導いただきました九州大学狩野素朗教授に深く感謝いたします。また、実験の実施に際し、貴重な御助言、御協力をいただきました中村学園大学石田梅男教授および被験者として快く志願して下さった中村学園大学の学生の方々にも記して感謝いたします。

そこで、このような現実の社会状況に即して同調行動を検討するには、多数者の意見変動という時間軸を設定した実験状況を構成する必要があるであろう。

そこで、本実験では、(1)集団成員の意見が各々異なる状態から徐々に1つの意見にまとまっていく段階（これを形成期と呼ぶ）、(2) Ss 以外の全集団成員が1つの意見に一致している段階（これを一致期と呼ぶ）、(3) 一致していた意見を各集団成員が放棄していく段階（これを崩壊期と呼ぶ）の3組を設定する。そして、このような状況設定によって本実験は、集団の意見が形成されていく中のどの時点でどのように同調行動が生じてくるのか、また、その集団意見が崩壊していく中で同調行動がどのように変動していくのか、といった同調行動の変化のプロセスを多数者意見の Reality の高低との関連の中で把握することを試みる。以上のように、本実験では、Reality の高さと多数者意見の変動という2つの要因を取りあげるが、このことにつき次のことが予測される。

“斉一性への圧力”の強い一致期には、Reality の高低にかかわらず圧力が同調行動出現の主たる規定因であろう。一方、斉一性への圧力の弱い形成期や崩壊期には、Reality の高低が同調行動出現に大きな効果を持つだろう。このことを、Reality 高群と Reality 低群に分けて考えてみる。

Reality が低い多数者意見の場合は、その意見自体の持つ情報的影響力が小さいので、圧力の弱い形成期には、Reality が高い多数者意見に対する場合ほど同調が生じないであろう。更に、圧力が減少する崩壊期にはその圧力減少に伴って一致期に生じた同調行動も減少するであろう事が考えられる。一方、Reality が高い多数者意見の場合は、その意見自体の持つ情報的影響力が大きいために圧力の変化の影響を受けることが少なく、形成期や崩壊期にも同調行動の出現ないし持続が多く生じるであろうと考えられる。

以上より、本実験で考えられる仮説は、次の通りである。

仮説1；形成期では、Reality 高群は Reality 低群よりも同調行動が多く生じるであろう。

仮説2；一致期では、Reality 高群と Reality 低群の同調行動には差がないであろう。

仮説3；崩壊期では、Reality 高群は Reality 低群よりも一致期までの同調によって形成された行動がより持続するであろう。

方 法

実験時期：1982年10月

被験者：女子短大生20名（Reality 高群，Reality 低群，各10名に分ける）

実験条件：(1)多数者の主張する意見が正解に近く誤りが少ない条件がReality高条件、(2)多数者の主張する意見が正解からかけ離れており極端に誤りである条件がReality 低条件である。30試行の本試行は、より現実の社会状況に近い自然な状況にするため、次の条件が設定された。(1)集団成員が各々異なる意見を主張している状態から徐々に意見を一致させていき多数者となる状態（形成期）、(2)全員一致している状態（一致期）、(3)更に、一致させていた意見を各集団成員が放棄していく状態（崩壊期）。ここで、形成期、一致期、崩壊期を画一に10試行ずつにすることは非常に人為的に見え実験に対する疑いを Ss に生じさせることになるかもしれないと考えられた。そこで、30試行は、(1)形成期10試行、(2)一致期15試行、(3)崩壊期5試行から構成された。なお、形成期は、集団の意見がより自然に一致していく状況を模したものにするために更に形成のプロセスを1) 集団成員の意見が全て異なる3試行、2) 1名の集団成員がある意見を主張する3試行、3) 2名の集団成員がある意見に一致する2試行、4) 3名の集団成員がある意見に一致する2試行から構成した。

要因計画は、Reality の高低（群間）×多数者意見変動要因（群内）の2要因計画である。

課 題：9秒、12秒、15秒、18秒、21秒の5水準の音刺激をシンセサイザーによって作った。その中から1試行毎にいずれか1音を聞かせてその音の長さを判断させる課題である。なお、予備調査として、本実験の音課題に関して、他者からの何の影響もない条件のもとでの各回答についての反応を測定したところ、96%（本実験とは別の10名の Ss による全回答の平均値）が正答である①番と判断する課題であることを見出した。

手続き：Ss はついたてを隔てて5人横1例に座る（Fig. 1 参照）。各 Ss の机上には自分の回答用の押しボタンと、自分を含めた参加者5人全員の回答が表示されるパネルからなる子器が設置されている。全員が着席しヘッドフォン装着後、つぎのような教示が行われた。1) この実験は音の長さを判断する実験であり、時間に追われる現代人の短い時間に対する時間感覚の正確さを調べる基礎資料とする、2) 試行数は30試行である、3) 1試行毎に音を聞いたあと、5種類の選択肢（単位：秒）が、5人全員が見えるところにおかれた選択肢呈示用パネルによって呈示される。その選択肢の中から正解と思う番号を1つ選び、回答用押しボタンを押して答える、4) 正解は30試行を通して常に同じ番号にある。教示終了後、

Fig. 1. 実験場面

回答順番を決めるためと称して各 S_s にアルファベット 1 文字 (A～E) の書いてあるカード 5 枚の中から 1 枚を選ばせた。しかし、全カードは E であり、全 S_s の回答順番は常に 5 番目となる。すなわち、集団の他成員の回答であるとして S_s の机上パネルに、操作された 4 つの回答が表示された後に S_s が回答することになる。試行毎に音が流れ終わると同時に S_s に呈示される 5 種類の選択肢には、①番に正解である実際の秒数、②～⑤番に順に +2 秒ずつ正解からずれた秒数が示される (例：9 秒の音刺激を聞いた場合の選択肢は① 9 秒、② 11 秒、③ 13 秒、④ 15 秒、⑤ 17 秒)。①～⑤ へと徐々に誤りの程度が大きくなっている。そこで、実験操作として、Reality 高条件では多数者意見であるとして S_s に表示される意見は②番、一方、Reality 低条件では多数者意見であるとして S_s に表示される意見は⑤番とした。30 試行の本試行に先だち、時間知覚の極端な個人間のばらつきを統制する目的で、各 S_s に 3 秒の長さの音を 3 回聞かせた。

結 果

処理方法 分析にあたり、形成期についてはある意見を主張する集団成員数を基に、B 1 (集団成員の意見が全て異なる)、B 2 (1 名の集団成員がある意見を主張する)、B 3 (2 名の集団成員がある意見に一致する)、B 4 (3 名の集団成員がある意見に一致する) とに分けた。また、一致期 (S_s 以外の 4 名の集団成員がある意見に一致する) については 5 試行を 1 ブロックとして前、中、後を各々 B 5、B 6、B 7 に分けた。更に、崩壊期の 5

試行を B 8 とした。ここで、ある意見に一致していくことの操作的規定は、Reality 高群では選択肢②と回答する成員数が増えていくことであり、Reality 低群では選択肢⑤と回答する成員数が増えていくことである。そこで、Reality 高群の同調率は、B 1 から B 8 までそれぞれ、一致期の多数者意見と同一回答を行った回数/そのブロックの試行回数 $\times 100$ (%) で算出した。Reality 低群の同調率は、同様に一致期の多数者意見 (⑤) と同一の回答を行った回数/そのブロックの試行回数 $\times 100$ (%) で算出した。

8 ブロック (B 1～B 8) に分けた後の、Reality 高群と Reality 低群の同調行動の変化のプロセスを図示したものが、Fig. 2 である。B 1 は、集団成員の意見がすべて異なる状態であり、② (Reality 高群) あるいは⑤ (Reality 低群) と主張する成員がまだ存在していない時点なので、Fig. 2 の B 1 の時点の②あるいは⑤という回答率を同調が生じる前のベースラインと考える。B 2、B 3 では②あるいは⑤という回答を行う成員数がまだ多数者となっていないが、②あるいは⑤という回答を主張する成員数が増すにつれて、その意見へと自己の意見を変化させているので、同調として Fig. 2 に示している。崩壊期 B 8 では、多数者意見が崩壊し成員の意見が分裂している状態である。その中で一致期の多数者意見への同調を続けている (すなわち②あるいは⑤と回答し続ける) ものが Fig. 2 の B 8 の時点に示されており、行動の持続性の指標となっている。

Fig. 2. 多数者意見変動状況における同調行動の変化

多数者意見変動状況における同調

この結果について、各 S_s の同調率を角変換後、Reality の高低 $\times$ 多数者意見変動要因の 2×8 の分散分析を行ったところ、多数者意見変動要因の主効果 ($F=7.170$, $df=7/126$, $p<0.01$) のみが見出された。Fig. 2 に示されるように、形成期後半の B 4 (つまり、集団内の S_s 以外の他成員 4 人中の 3 人がある意見に同意している状

態)で, Reality 高群と Reality 低群の同調率増加傾向に大きな差が見られる。その後の一致期の B 5, B 6, B 7 では, 徐々に同調率の差が縮まっていることがうかがえるであろう。更に, 崩壊期の B 8 には, 再び Reality 高群と Reality 低群の差が大きくなっている。つまり, Reality 高群は Reality 低群とくらべて, 一致期に生じた多数者意見への同調行動が崩壊期にも持続していると思われる。多数者意見変動要因×Reality の高低の交互作用は有意水準には達しなかったが, 多数者意見変動要因の単純効果検定を試みた結果, B 4 における Reality 高低の効果 ($F=3.988$, $df=1/144$, $p<0.05$) に有意差が見られた。また, B 8 においても Reality 高低の効果 ($F=3.256$, $df=1/144$, $p<0.10$) に傾向が見出された。一方, B 5, B 6, B 7 の一致期には, Reality 高群と Reality 低群の同調率に有意差は見出されなかった。

考 察

本研究の結果より, Reality 高群と Reality 低群の同調率は多数者意見変動(形成, 一致, 崩壊)要因によって変化するということが示された。すなわち, 形成期には Reality 高群と Reality 低群の同調率に差が見られ, 一致期にはその差がなくなり, 更に崩壊期には再び差が見られた。

そこで, 以下のように形成期, 一致期, 崩壊期に分けて, それぞれの段階における Reality 高群と Reality 低群の同調率に及ぼす多数者意見変動要因の効果を検討する。

Reality 高低と同調

形成期の B 1, B 2, B 3 では Reality 高群と Reality 低群の同調率に差が見出されなかったが, B 4 では Reality 高群と Reality 低群の同調率に差が見出され, Reality 高群の同調率だけが増加している。B 4 とは, Ss を含めた 5 人集団の中の 3 人が同じ意見に一致する時点, すなわち初めてその意見を主張する人が過半数の意見となる時点である。その B 4 の時点で, Reality 高群のみその Reality 高である多数者意見への同調率が増加している事については, 次のように考えられる。つまり, Reality 高である意見はもともと意見自体の持つ情報的影響力が大きい。そこで, その意見を主張する集団成員数が全員一致に至る以前の比較的早い時期である, 過半数となって多数者となった時点で, 同調を生じさせるに充分なのであろう。一方, Reality 低群では意見自体の持つ情報的影響力が小さい。従って, 事実とのズレが大きいその意見を主張する集団成員が過半数を超えて多数者となっただけでは同調を生じさせるには不十分な

のであろう。これは仮説 1 を支持する結果である。

一致期における B 5, B 6, B 7 のいずれにおいても, Reality 高群と Reality 低群の同調率に有意な差が見出されなかった。これは仮説 2 を支持する結果であるといえよう。一致期には, Reality 高群も Reality 低群も, Ss 以外の全集団成員がひとつの意見に一致する。それによって, その意見への“斉一性への圧力”が最も強くなり, Ss の行動に大きく影響を与えられ考えられる。従って意見の Reality の高さのちがいにもかかわらず, 強い斉一性への圧力のために Reality 高群と Reality 低群の同調率は有意な差を持つに至らなかったであろう。

崩壊期においては, Reality 高群が Reality 低群よりも一致期までに同調によって形成された行動の持続が多いという結果は, 仮説 3 を支持するものである。崩壊期とは, 一致期に全員一致して主張していた意見を徐々に各成員が放棄していく段階である。すなわち, 一致期に生じていた斉一性への圧力が崩壊期には減少すると思われる。従って, Reality 低群ではもともと意見自体の持つ情報的影響力が小さいので, 圧力が減少するとともに同調行動も減少すると考えられる。一方, Reality 高群ではその意見自体の持つ大きな情報的影響力が Ss のより内的な面まで影響を与えたために多数者が意見を放棄した後も同調行動が持続したと推察される。本実験によって, 従来の実験場面である一致期だけでなく形成期, 崩壊期においても意見の Reality の高さが同調行動に大きな効果を持つことが確められた。

多数者意見変動状況における同調

次に, 形成期, 一致期, 崩壊期をあわせて B 1 ~ B 8 を通しての同調行動の時間的変化という観点から, Reality 高群と Reality 低群のそれぞれを検討する (Fig. 2 参照)。Reality 高群では, B 4 の時点で同調率が急激に増加した後, B 4 から B 5, B 6, B 7 まで高い水準が維持されたまま, ほぼ横ばいの状態である。一方, Reality 低群では, B 4 の低い段階から B 5, B 6, B 7 まで徐々に同調率が増加し, 同調率のピークは一致期の最後の B 7 にあることが見受けられる。すなわち, 時間の横軸で同調行動の変化をみると, 多数者意見の Reality が高い場合の方が Reality が低い場合よりも集団意見形成の, より早い時期から同調が始まるといえる。従来は実験の始めから斉一的意見が既に形成されてしまっている状態をつくりあげて同調の有無を検討していたのに対し, 本実験はその前段階である形成期を設定したことによって, 集団意見が一致する途中の段階ですでに同調が生じるという事と, 更に, Reality の高さによってその同調の生起曲線の様相が異なるという事を明らかにしたとい

えるだろう。さて、これまで Schroder & Hunt (1958) は、中くらいの規範に同調する人と極端な規範に同調する人の間のパーソナリティの違いを見出した。それによって中くらいの規範への同調と極端な規範への同調は異なる心理プロセスを含むのではないかということが示唆された。そして、Deutsch & Gerard (1955) の情報的影響と規範的影響の区別を用いて、中くらいの規範への同調は情報的影響力が作用しており、極端な規範への同調は規範的影響力が主に作用しているのではないかと考えられた。本実験をこの観点からみると、一致期、崩壊期の行動を比較検討していくことがこの2つの影響の作用のしかたをより具体的に解明する方法にもなると考えられる。

Reality 高群と Reality 低群は情報的影響力が異なる条件であり、それを形成期、一致期、崩壊期という規範的影響力の増加し減少していく中でみるということになる。すると、B 8 の時点で Reality 低群のみ同調率が低下したことも、規範的影響力の弱まる崩壊期には情報的影響力が同調行動の大きな規定因になるからであろうと考察されよう。

一致期について、その同調への圧力は時間の経過の中で一定ではなく、やはり全員一致した意見をもつ試行数が多くなるほど徐々に強まっていくのではないだろうか。また、崩壊期において Reality 高群での同調行動の持続が見出されたが、この持続についても一致期の期間の長さが関連するものと思われる。本実験によって Reality の高低が同調行動の形成ないしその持続に特定の関係をもつことが見出された。このことは、以上の要因が個人の内面にどのように影響を及ぼすかを示唆するものと考えられる。この点を解明していくことが今後の研究課題と思われる。

更に、本研究では徐々に斉一的行動を崩壊させていく方法を用いたが、現実場面ではしばしば観察されるように、突然に従来の価値観が変動する（例えば戦時中の価値観が終戦によって一挙に変動するなど）ような崩壊の場合の人の行動と内面の変化を検討することも重要な研究課題であると思われる。

また、以上のような斉一的行動の形成、崩壊は現実場面では一回きりではなく繰り返されていくものである（例えば流行の変遷等）。その様な状況の中で初めの斉一的行動に同調した人々は、その規範が崩壊していくプロセスの中で生まれてくる次の斉一的行動に対してはどういう行動を示すのか、一方、初めの斉一的行動に同調しなかった人はどうなるのかといった点も興味深い研究課題となろう。

要 約

同調行動について、多数者意見の形成期、一致期、崩壊期の3つの変動期を設定し、意見の Reality の高低が各期における同調にもたらす効果を検討した。

被験者は女子短大生20名であった。被験者に呈示される多数者意見が正解に近い場合を Reality 高群とし、正解からかけはなれた非常に誤ったものである場合を Reality 低群として設定した。課題は時間判断課題を用いた。全体の30試行のうち、意見がしだいに一致していく第10試行までを形成期、意見が全員一致している15試行を一致期、意見が徐々に互いに異なっていく5試行を崩壊期とした。

本研究によって見出された結果は次の通りであった。同調行動の発生ないしその持続には、多数者意見変動要因（形成期、一致期、崩壊期）の主効果が見出され、下位検定の結果、

1. 形成期初期には、Reality 高群と Reality 低群の同調率に差はないが、形成期後半の、その意見を主張する人数が集団の過半数を超えた時点で、Reality 高群のみ同調率が増加した。
2. 一致期には、Reality 高群と Reality 低群の同調率に有意な差は見られなかった。
3. 崩壊期には、Reality 低群は一致期で形成された同調行動が減少したのに対し、Reality 高群では一致期の行動が持続する傾向が見られた。このことは、意見の Reality が高い場合は、一致期における多数者行動が個人に、より内面への影響を与えたものと考察した。

引用文献

- Asch, S.E. 1956 Studies of independence and conformity: A minority of one against a unanimous majority, *Psychological Monographs*, 70, no. 9.
- Deutsch, M. & Gerard, H.B. 1955 A study of normative and informational social influences upon individual judgement. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 51, 29-636.
- Nemeth, C. & Markowski, J. 1972 Conformity and Discrepancy of Position. *Sociometry*, 35, 562-575.
- Olmstead, J.A. & Blake, R.R. 1955 The use of simulated groups to produce modifications in judgement. *Journal of Personality*, 23, 335-345.
- Schroder, H.M. & Hunt, D.E. 1958 Dispositional effects upon conformity at different levels of discrepancy. *Journal of Personality*, 26, 243-258.

—1984年3月1日 受稿, 1984年7月20日 受理—

THE EFFECTS OF OPINION'S REALITY ON CONFORMITY IN THE CHANGING SITUATIONS OF MAJORITY OPINION

KUMUKO YOSHITAKE

Kyushu University

ABSTRACT

The experiment was conducted to test the effectiveness of majority opinion's reality on conformity in following three changing situations: (1) majority opinion formation period (2) unanimity period (3) breakdown period. Twenty female college students responded on a time perceptual task through 30 trials in one of the following two conditions: (1) high reality: Majority's opinion was less erroneous; (2) low reality: Majority's opinion was obviously erroneous. Major results were as follows. 1. In the early opinion formation periods, the conformity rates were equal in both

reality conditions. But in the late opinion formation period when for the first time more than half of the group members agreed to the opinion, the conformity rates of only high reality condition increased radically. 2. In the opinion unanimity periods, the conformity rates of both conditions were not different. 3. In the opinion breakdown periods, under high reality condition the conformity behaviors tended to continue, whereas under low reality condition that tendency was not observed, suggesting that under high reality condition majority opinion will give the individuals more internal effects.

Key words: conformity, reality, majority, informational influence, normative influence.